課題である。ヤスパースは、人間の意識の「主観-客観-分裂 (Subjekt-Objekt-Spaltung)」構造を手がかりに、実存と超越を意識化させる。すなわち、あらゆるものは、意識作用を介して対象化されて現前するが、対象化・分裂に一瞬先立つ「賓主未分」の領域においては、やがて主観となるもの||実存と、やがて客観となるもの||超越とが混在しているという推察から、両者を導き出すのである。

これらの側面は、それぞれ「つつむもの」であり、それは、何であれ対象を絶対化することの誤りを教える。すべての対象は、「つつむもの」の一側面を場とする現象に過ぎない。例えば、超越という「つつむもの」において或る対象が絶対化されるということは、或る神的なものが絶対化されることを意味する。しかし、人間にとって対象となる神は、ヤスパースによれば「近くの神」であり、それは現象という意味において真理性を有しているが、同時に、その背景にあつて決して現象化されない「つつむもの」としての「遠くの神」が失念されてはならない。従つて、冷静な思惟の遂行によつて、「つつむもの」のすべての側面を適切に連関づけ、一側面に固執しないことが、我々の課題となる。

その課題へ向けて働くのが、理性という能力であるとヤスパースは言う。理性とは「交わりへの意志」であり、それは我々が一側面に傾倒し、閉鎖的となることに抵抗する。言わば我々が人間的であるとき、それは我々が理性的であるときであり、またそれは、「つつむもの」の諸側面が適切に連関しているときなのである。

しかし、上述のような思惟の遂行にもとづく理解で、我々のところは、本当に満たされるのだろうか。やはり最後は、全人格を関与させた働きかけが必要なのではないか。それをヤスパースは「内的行為 (inneres Handeln)」と呼ぶ。「哲学的信仰」は、「つつむもの」という思想の遂行と、交わりへの意志に貫かれた「内的行為」による、「あらゆる人間のうちにある根源」(ヤスパース)としての「脱宗教的精神性」への憧憬なのである。

『三源泉』以前の

ベルクソン哲学における宗教性

伊達 聖伸

ベルクソンが明示的に宗教的事実を扱うようになったのは、やや遅い。そのため、初期ベルクソンに一定の宗教性が窺えるようだと、の思いから、何の前提もなしに「ベルクソンの宗教性」を語り出すことはためらわれる。ベルクソンが宗教の問題に取り組むようになったのはいつからかという時期確定の問題は難しいが、本発表では、ルネ・ヴィオレットが「スピリチュアルになる手前の形而上学」と呼んだものを「宗教性」に対応させることで「宗教性」と「宗教」を理念的に区別する。そして、ベルクソンにおける宗教(的なもの)の位置は、潜在的な地平から顕在的な地平に移行したと考える。

第2部会

もうひとつ述べておきたいのは、たしかに『道徳と宗教の二源泉』では、静的宗教と動的宗教の質的な違いが提示され、前者から後者へ移る筋書きがある程度示唆されているが、それを具体的に把握するにはベルクソン哲学全体についての理解が必要だということである。社会的な外部性から個人的な内部性への転換と内的な生の発展という主題は、初期ベルクソンから論じられているが、これに注目することで、静的宗教と動的宗教の「あいだ」に「宗教性」を位置づけることができるのではないか。

そこで本発表では、ベルクソン哲学の宗教性を心理学的・存在論的な三つの観点から指摘する。第一の要素は、「差異の経験としての持続」である。ベルクソンは言う。「多くの場合私たちは自分自身に対して外的に生きており」、「自分自身をとらえなおす機会が稀」である。この稀なる瞬間は、差異の経験として生きられる。人は持続において自分自身を取り戻し、いわば普段よりも一段高い精神状態で生きると考えられる。

第二の要素は、实在分割と世界表象にかかわる「人類学的な装置」である。このときベルクソンに特徴的なのは、知覚の拡張と認識枠組みの刷新によって表象図式が創造的に生成変化すると考えていることだ。芸術家が「知覚の拡張」に関心を持っているように、哲学者は「悟性の枠組みを必要に応じて壊し、そうして悟性の枠組みを少しずつ広げ、人間の思考を無限に膨らませていくことを目指している」。

第三の要素は、時間的な存在である人格性を照らし出す「存在論的直観」である。持続をとらえ(第一の要素)、表象図式を

発達させる(第二の要素)ことは、実は人格の問題と深く結びついている。というのも、ベルクソンにとっての人格は、アプリアリオリな統一性(カント)ではなく、たえずなりゆく動きとしての持続であり、また人格の統一性が意識されるのは、表象図式の変化の意識化と表裏一体だからである。直観のひとつひとつはきわめて特殊な「種」であるが、それらはみな同じ「類」に属している。これは、直観による「救済」が具体的な「生の曲率」の把握であることを示唆しているように思われる。

以上の三つの要素は、『二源泉』以前のベルクソン哲学においてすでに観察することができる。『創造的進化』において「自我」が「生全体」に置き換えられるとき、それは宇宙論的な射程を獲得するであろうし、また『二源泉』においては、社会的・歴史的な射程を獲得していくことになるだろう。

また、これら三つの要素はベルクソンにおいて有機的に絡まっているということ、そしてこれらはみな人間の具体的経験に即して得られる宗教性であるということを考慮することが重要である。この宗教性は、自然によって与えられた静的宗教と、個人的な神秘家による動的宗教の「あいだ」を生きている、いわば努力する凡人に適したものと言えよう。